

〔研究ノート〕

素庵研究(1)

『惺窩詩集』に記録された素庵の画事

月刊誌『現代』1994年2月号に「日本史をつくった101人」を選ぶ、伊東光晴(京大名誉教授)、五味文彦(東大教授)、丸谷才一(作家)、森毅(評論家)、山崎正和(阪大教授)の五氏による白熱の大討論の記録が掲載されています。日本史に影響を与えた人というのが選択の基準で、古代の渡来人で漢字を伝えたという王仁(わに)から現代の政治家故田中角栄氏までの101人が選ばれ、この討論自体がいままでの常識史観を覆す新「日本論」になっている、じつに面白い内容です。

中世から近世にかけての商業のシステムをつくった人として、角倉了以(すみのくらりょうい、1554-1614)・素庵(そあん、1571-1632)親子のうち、父の了以が代表して選ばれました(森、山崎、五味氏推薦)。

また視点をかえて、日本の美意識を代表する人を選ぶとすれば、まず歌人の藤原定家であろう(丸谷氏推薦)。そして経済人では、(山崎正和氏)「私は角倉親子だと思いますよ。リストでは了以を入れましたが、彼の家はもともと医者なんです。医者から帯屋になって金融資本になって、同時に貿易だとか道具だとか多角的なことを全部やった。同時に技術者でもあって、河川掘削なんてことも自分でやる。一種のルネサンス的人間なんです。文芸・美術に対する教養が深いというのは、日本の良質の商売人の一般的な特色ですが、彼は教養の高い商売人です。教養の高い商売人というのは、おそらく日本と西洋のルネサンスにしかいません」。

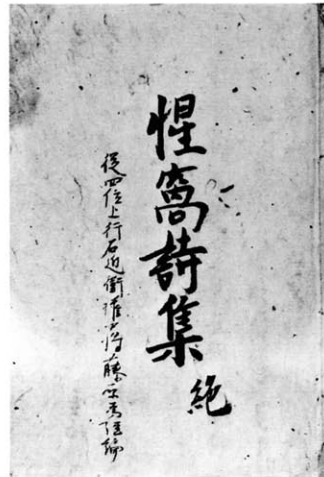
この魅力的な日本のルネッサンス人、角倉了以・素庵については、林屋辰三郎先生の名著『角倉了以とその子』(1944年、星野書店)、

『角倉素庵』(1978年、朝日新聞社)の二書によって、ほとんど研究尽くされた感がありますが、といっても、林屋先生が見落とし、あるいは見捨てた素庵についての史料がいくつか遺されているのも事実です。そこで、この『美のたより』の紙上を借りて、素庵史料を見直してみたい、林屋先生の研究のささやかな捨遣のまねごとを行ってみたいと思います。

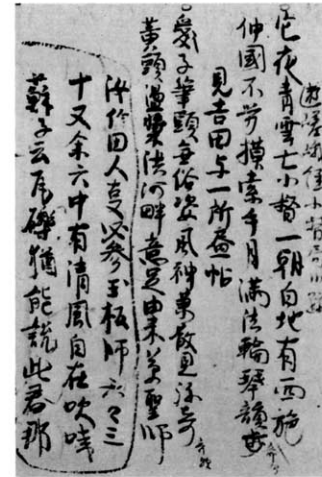
さて、東京の古典籍の老舗「弘文荘」が出版した『創業四十周年記念・弘文荘名家真蹟図録』(1972年)と『創業満五十年記念・弘文荘敬愛書図録』(1982年)の二冊に、近世儒学の祖、藤原惺窩(1561-1619)の自筆になる七言絶句の漢詩集『惺窩詩集』(草稿本一冊)が三葉の図版(表紙と三頁分)とともに掲載されています。

この『図録』の解説によりますと、この詩集は美濃判袋綴、墨付十七枚、共紙表紙の中央に惺窩の自筆で大きく「惺窩詩集絶」と記されています(写真1)。文禄慶長頃に成ったものと考えられ、惺窩の正系にあたる下冷泉家(しものれいぜいけ)に伝来し、惺窩の曾孫為経の手扱(愛読すること)になるものです。本文八行行書、みな七言絶句で、およそ六十篇の詩が収められ、流布の刊行本『惺窩先生文集』(冷泉為経篇)とは配列の順序が異なり、辞句の相違も多く、未収の詩もあります。

本文第二葉裏に、「見吉田与一所画帖」(吉田与一が書く所の帖を見て)と題した七言絶句が収録されており(写真2)、この詩は前の刊本には漏れています。「吉田与一」は、じつは角倉素庵のごとで、諱(いみな)は玄之(はるゆき)、後貞順と改め、字(あざな)は子元といい、素庵と号しました。天正十六年(1588)素庵十八歳のとき、叔父



1 惺窩詩集(表紙)



2 惺窩詩集(自筆草稿)のうち

の紹意(了以の弟。侶庵と号す。惺窩の弟子。文禄四年1595没)とともに相国寺に往き、当時ここに居た惺窩に初めて拝謁しました。惺窩(当時二十八歳)の弟子になったのです。詩は次の通りです。(釈文)

見吉田与一所画帖

愛子筆頭無俗姿 風神蕭散見珍奇
黄頭盪樂洪河畔 意足由来草聖師

(愛子の筆頭に俗姿なく。風神蕭散、珍奇を見す。黄頭は樂を洪きな河畔に盪かす。意は足る、草聖の師に由来するを。)

素庵吉田与一が描くところの画帖を見せられた惺窩は、その感想を七言絶句で表しました。素庵の筆跡には俗なところがなく、気品ある画趣がたまたよい、もの珍しさを見(しめ)しています。図様は、黄色の帽子を着けた一人の船頭(前漢の鄧通、蜀郡南安の人で、能く船に棹さすので黄頭郎(船頭の役)になり、文帝に寵愛されて上大夫となり、富裕になったが、後、没落した。『史記』侯公伝)が洪(おお)きな河畔で樂(かじ)を盪(うご)かしているところが描かれています。その筆法は、草書の開祖、張旭(唐時代)に基づいており、充分にその由来が表現されています。

(釈文は奈良大学教授古原宏伸氏のご教示による)

この惺窩の詩は、素庵について興味深い事実を私たちに示しています。一つは、従来、素庵は光悦流の能書家として知られていますが、これにより、彼が張旭の草書の書法を学んでいたことが知られます。本来、彼は中国書法の人であったと思われる。

もう一つ重要な事実は、素庵自ら画筆をとり画帖を描いていることです。いままで彼の画事についてはまったく知られていませんでした。詩の内容から推して、画帖の一図には、河畔で楫を漕ぐ船頭が描かれており、惺窩はその人を「黄頭の鄧通」と見えています。そこには画題か詩文が草書で書かれてあったものと推察されます。

鄧通については、一般には、中国古代から南北朝までの有名な人物の言行を集めた『蒙求』(もうぎゅう、唐の李瀚撰)に収録された「鄧通銅山」の故事で知られています。としますと、この素庵の画帖は、『蒙求』の故事を何図か描いたものかも知れません。彼は、どんな画手本によってそれを描いたのでしょうか。

ところで、この惺窩の詩「見吉田与一所画帖」は、いつ詠まれたか